勇気をだして。

れんじょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇気をだして。

【Ｎコード】
Ｎ４４５０Ｖ

【作者名】
れんじょう

【あらすじ】
勇敢な兄うさぎと臆病者の弟うさぎ。けれど本当は弟うさぎも勇敢だったのです。
本来ある勇気を弟に見つけてもらおうと、兄うさぎが強引に弟うさぎを旅立させます（というか、迷子に??）弟うさぎは自分にある勇気を見つけることができるのでしょうか？

第一話

ある森に、仲のいいきょうだいうさぎがおりました。

お兄さんうさぎは正義感が強くて、とーっても頼りになりました。弟うさぎはそんなお兄さんうさぎをとーっても尊敬していて、いつもお兄さんうさぎの後を追っていました。

そんなある日のことです。
お兄さんうさぎが言いました。

「俺はもっと森のことをよく知りたい。だから森の奥に行ってみようと思う」

弟うさぎは驚きました。
だって、うさぎというのはとってもとっても縄張りを大切にしているからです。その縄張りである村から外にでるなんて考えてはいけないことだったのです。

「それはとても勇気のいることです。僕にはとうていできません」

村の禁忌を行おうとしているお兄さんうさぎでしたが、その行動力を弟うさぎは尊敬しました。けれども禁忌を犯すという行為を弟うさぎは恐怖しました。

「何言ってんだ？お前も一緒に行くんだぞ？」

その言葉に弟うさぎはそれこそ飛び上がってしまいました。

この村を出るなんてことは生まれてこのかた考えたこともなかったからです。
それにいくらお兄さんの言葉でも、禁忌を犯すつもりはありませんでした。

「できません。お兄さんは勇気のある人ですからそれもできるでしょうが、僕には村を出るということができません」
「駄目だなあ。そんなんだからお前はいつも村の奴らにいろんなことを言われるんだ」

お兄さんうさぎはため息をつきました。

そうなのです。
いつもいつもお兄さんの陰に隠れるようにしている弟うさぎを村の他のうさぎたちは『臆病者』といって蔑んでいたのです。
お兄さんうさぎは弟が臆病者だとはちっとも思っていませんが、村のうさぎたちがそれでは納得しないのです。
ですから皆がしないことをして、弟を臆病者だとは言わせないようにしようと思い立ったのです。

第二話

お兄さんうさぎは言いました。

「俺はお前と一緒に森の奥まで冒険しに行きたいんだ。だからお前もそのつもりでいろよ」

はたから聞いたらちょっと乱暴に聞こえるかもしれませんが、お兄さんうさぎはここで弟うさぎを連れて出れないと計画が駄目になってしまうからと必死なのでした。

「でも……」

「でもじゃない。どうしてもどうしても一緒にいくんだ。お前が一緒なら、冒険も楽しくなるからな」

お兄さんうさぎはつばが飛ぶくらい必死に弟うさぎに言いました。けれど弟うさぎにはどうしてもふんぎりがつきません。

とうとう俯いてお兄さんうさぎをまともに見ようともしなくなりました。

しかたがないなあ
こいつは結構頑固だし
一度嫌がると絶対しないもんな

ため息をつきながらもお兄さんうさぎは、弟うさぎの肩をぽんぽんと叩いて「いつか、いつかでいいから一緒に冒険しような」と言いました。

その言葉にを真に受けた弟うさぎはやっと顔をお兄さんうさぎに見せて、「うん」と頷きました。

その日の夜のことです。

ぐっすり寝むている弟うさぎを揺り動かして起こそうとしているうさぎがいました。

お兄さんうさぎです。

ふにゃふにゃと寝ぼけ眼でお兄さんうさぎを見た弟うさぎは、お兄さんうさぎが指を口にあてたので話してはいけないのだと思い、何事とばかり首をかしげました。

するとお兄さんうさぎは、ついてくるように身ぶりで示し、そうして外に出ていきました。

なんだろう？

そう思っても、お兄さんうさぎを尊敬してやまない弟うさぎですから、そのまま他の家族を起こさないようにそおっと外に出ていきました。

「誰も起こさなかったか？」

お兄さんうさぎが家の中をのぞくようにして言いました。

「大丈夫です。静かに出てきましたから」

こくりとうなづいた弟うさぎは、お兄さんうさぎがちょっとなにか変だということに気が付きました。

「ところで、何でしょうか？こんな遅くに起き出して。明日の畑仕事に差しさわりがでてしまいます」

外に出てから何も行動をしないお兄さんうさぎをちょっといぶかりながらも、あまり長い時間起きておくと明日に予定している作業がしづらくなると思ってそう言ってみました。
弟うさぎにしては、お兄さんうさぎに苦言を言ったのは初めてのことだったかもしれません。
それほど明日の仕事はきついはずだったのです。

「いや……、さっき起きたときに何か変な音が聞こえたと思ったので調べようと思ってさ。そろそろ人参が収穫時だろ？盗んでいく奴がいるって話だったし」
「ああ。そういえばお隣さんの畑もちょっとばかり荒らされたと聞きました。さすがは兄さん。小さい音だっただろうによく聞こえますね。じゃあ畑を見回りにいかないと」
「そうだな。……ちょっと待て。あったあった。じゃあいこうか？」

お兄さんうさぎは家の物置にあった袋を背負って、弟うさぎの前に立って畑へと向かいました。
弟うさぎもそのあとをいつものように追いかけていきました。

畑には後は抜かれるのを待つばかりの青々とした人参の葉が見えていました。
その中にがさごそと動く影を見つけた弟うさぎは、お兄さんうさぎに知らせようと探しましたがどこにもいませんでしたので自分が捕まえなければと、その影の後を追っていきました。
その影は、どんどんどんどん森の奥へと入っていきます。

弟うさぎはとても怖かったのですが、お兄さんうさぎを待っていたらその影を見失ってしまうので怖いのを我慢して一生懸命追いかけました。

途中、お兄さんうさぎに自分がどこにいるのかわかるように、二匹の間で使われている秘密の合図をしていきました。

影は逃げることを諦めません。

弟うさぎは体力が尽きてしまいそうになりましたが、ここで音をあげたらせっかくの今までの努力が無駄になってしまうと、そのまま一生懸命追いかけ続けました。

するとどうでしょう。

夜遅くに始まった追いかけっこが、だんだんと空がしらじらと明けてきて、とうとう辺りは明るくなってしまったのです。

どうしよう！

お父さんやお母さんに心配をかけてしまった！

それに今日は人参を収穫しないといけないのに、僕や兄さんがいないと大変なのに！

気がつくと、目の間にいたはずの影がいなくなっていました。

弟うさぎは深い森の中でただ一匹、取り残されてしまったようでした。

第三話

「……あれ？兄さん？」

ちょうど樹々が途切れ、そこだけぽっかりと空いた穴のように空が見える場所で、弟うさぎは後ろから目印を見つけて着いてきてくれているはずのお兄さんうさぎがいないことに気が付きました。

「兄さん……？脅かさないでください。早く出て気来て下さいよぅ」

辺りは空に上った太陽に照らされキラキラと輝いて見えましたが、臆病な弟うさぎはそれどころではありませんでした。

なぜって右も左もわからないはじめてきた場所に、たった一匹でいるのですから。

「兄さんっ！にいさぁんっ！」

不安に声を荒げたとき、樹々にとまっていた鳥たちが驚いて一斉に飛び立ちました。

それでも弟うさぎは声を大きくして、お兄さんうさぎを何度も何度も呼び続けました。

そうすることで、いつかお兄さんうさぎがひょっこりと現れるとでも思っているかのように。

一体何度、声をはりあげたことでしょう。

叫ぶ声に喉が痛くなって、とうとう弟うさぎは声をだすこともできなくなりました。

ようやく弟うさぎは自分がこの森の奥深い場所に一人きりでいるということを理解しました。

弟うさぎはもうどうしていいかわからなくなってしまっていました。

いつもならお兄さんうさぎがこういうときはどうしたらいいかわかっていましたし、お兄さんうさぎが必ず先頭に立って怖いモノから守ってくれていました。

けれど今はその頼りになるお兄さんうさぎはいません。

自分ひとりで切りぬけないといけないことにやっと気が付きました。

弟うさぎは考えます。

必死で必死で考えます。

そこで思い当たったことがありました。

それは、ここに来るまでにお兄さんうさぎとはぐれたときに使っている目印をつけていたことでした。

とりあえず一番近い木の幹をみると、影を追いかけていた時につけた無造作な印を見つけましたので、ここを起点に四方の樹々を見てみると、そのうちの一つにやはり傷がありました。

その印を見つけたときの弟うさぎったらありません。

さっきまでの不安はどこに行ったのか、自分が付けたはずの印を探し出すことに夢中になりました。

それをすれば村に必ず帰れるからです。

あ、ここにもある

こっちにも

あちこち見つかる印に、弟うさぎはちょっと首をかしげました。
だってそんなに印をつけた覚えがないからです。
けれどもその印は、お兄さんうさぎとの間の秘密の印でしたから、お兄さんうさぎと弟うさぎ以外のうさぎはしりもしないはずなのです。

おかしい
絶対おかしい
どうしてこんなに印があるんだろう

よく見てみると、その印は辺りの樹全部にあるように思えました。
そしてもっとよく見ると、その印の付け方が二種類あるように思いました。

もしかして兄さんが近くにいるのかもしれない……

そう思うと心強くなっていっそう印探しに力が入るのでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4450v/

勇気をだして。

2011年10月8日12時58分発行